

報告番号	甲 乙 第 号	氏 名	須山 智裕
主 論 文 題 名：戦中との連続性における中間小説・風俗小説の再検討 ——南方徴用作家、林房雄・石坂洋次郎・丹羽文雄を中心に			
(内容の要旨)			
本論文は、アジア太平洋戦争期の南方徴用作家を取り上げ、戦後占領期の中間小説・風俗小説の興隆をもたらすまでの、彼らの文学上の動態および創意工夫を追いかけて考察するものである。南方徴用作家とは、一九四一年十一月以降、国民徴用令に基づいて徴用され、南方で文化工作に従事した文学者たちのことで、帰還後も、現地での体験に基づいた小説や随筆を執筆・発表し、講演や座談会も数多くこなした。 中野聡『東南アジア占領と日本人——帝国・日本の解体』（岩波書店、二〇一二年七月）は、日本占領下の東南アジアは、日本人が「被占領者としての「他者」」と向き合うことを通じて帝国日本の虚妄を自ずから悟ることになる、「日本と日本人の戦後に開かれた「学びの場」」であったという側面を明らかにしており、筆者の研究に示唆を与えている。それは、戦争それ自体やその遂行のための社会システムは悪であるということとは当然の前提として、外地は個々人にとって「学びの場」ともなり得、戦後日本の建設に向けた手掛かりを与える場合があったという視点である。 実際、南方徴用作家たちは、派遣先の外地での「学び」を、戦後の時空間において加工・転化することで、自らの創作（論）を成していく場合があった。特に、占領期に隆盛を誇った中間小説・風俗小説の書き手には南方徴用作家が多く、その中から、中間小説の起点をなす林房雄、常に風俗小説をめぐる議論の中心にあった丹羽文雄、風俗小説と民主主義論・戦後日本論を接合して成功を収めた石坂洋次郎を中心に論じ、従軍体験と中間小説・風俗小説の興隆の連関を明らかにしている。従来、戦時下の文学の研究と戦後（占領期）の文学の研究は別々になされることが多かったが、本論文では一九四〇年代論という立場をとり、戦時下の作家史や文学史と占領期のそれらを架橋している。 第一部は、陸軍報道班員が戦中に何を得、それをどのように転化して戦後の復活に至るかを明らかにする論文群である。 第一章で取り上げる林房雄は、そもそも陸軍報道班員であったことが知られていなかった作家であるため、その南方視察の経緯や旅程を掘り起こすところから始めている。			

林は、二十年後の大東亜共栄圏を描く小説、つまり後の「剣と詩」（『毎日新聞』一九四四年八月一九日～一九四五年二月一五日）の執筆を陸軍から依頼され、その陸軍や毎日新聞社の多大な援助を受けて南方を巡行したが、「未来篇」は書かれぬまま敗戦を迎えた。そして、戦中の民族主義的な言動から戦犯作家と見なされ窮地に立たされた際、かえって戦中の従軍の経験を利用し、外地を舞台にした小説を立て続けに読物雑誌『小説と読物』に寄稿することで復活を果たす。こうした変転を跡付けたうえで、林の占領期の代表作である「失はれた都」（『小説と読物』一九四七年一月）を読解し、「剣と詩」の多くを踏襲している同作が、大東亜共栄圏構想の理念を共有したことの責任を無化する機能を有するなど、敗戦後の状況に合わせるように加工されていることを明らかにしている。

第二章では、「民主主義の教科書」として名高い石坂洋次郎の「青い山脈」（『朝日新聞』一九四七年六月九日～同年一〇月四日）に、フィリピンにおける宣撫の経験からの「学び」が活かされていることを明らかにしている。陸軍報道班員となった石坂は、人見潤介が指揮する人見宣伝隊に同行して宣撫を観察し、民衆に大東亜戦争聖戦論のようなイデオロギーを理解させようとする観念的な説法の無力さと、「相互の人間的接触」が持ち得る説得力を目の当たりにした。石坂はこの経験から、戦後において、左翼陣営が唱えるような生硬な理念の体系である「民主主義」ではなく、行動型の「民主化」を提示することにこだわっており、その観点から筆者は、「青い山脈」の山場をなす理事会における雪子陣営の逆転勝利について、新たな解釈を示している。すなわち、雪子らは理屈によって理事たちを説得することに成功したのではなく、職業や性別などに囚われず「ザックバランに」話し合う状況を作り、その中で発生する「人間的接触」によって支持を集めたのだった。

第二部は、海軍省外郭団体・くろがね会が発行していた二つの雑誌の分析と、海軍報道班員・丹羽文雄の従軍体験と戦後の復活までを辿る論文で成り立っている。

第三章で扱う『海軍報道』（一九四四年五月～一九四五年三月）は、海軍の募兵を目的とし、二十万部発行された号もある国民大衆雑誌である。本章では、『海軍報道』の概要や誌面構成に加え、同誌とも深く関わる海軍報道班文学挺身隊の結成の経緯や具体的な活動を、先行研究より詳細におさえている。その上で、『海軍報道』に掲載された海軍挺身隊の小説群を分析し、経験や評価等いずれの面においても戦後に引き継がれるものがない、アジア太平洋戦争末期における南方徴用作家の終局的な挺身のありさまを明らかにしている。海軍報道部が指定する政治的目的に適うように小説を供する時、文学者の自律性は消失し、「戦後に開かれた「学び」」などは得られるべくもなくなる。例えば井上康文の「旋盤は動く」（一九四四年一〇月号）が、工場の幹部によって少年工員の海軍志願が妨害される事例を減少させるという海軍の目的に極めて忠実

であるように、文学者たちは、物語を十二分に海軍の宣伝内容に沿わせるという形で、政治への従属の極致を示した。

第四章は、前線慰問雑誌である『くろがね叢書』（一九四二年一二月～一九四五年二月（推定））の概要から書き起こし、同誌の探偵小説、そして戦争小説および歴史・時代小説に焦点を当て、慰問雑誌として興味深い点や、刊行を続ける中での内容の変化を論じている。『くろがね叢書』の最大の特徴は、既出の読物を集めたアンソロジーであるという点であり、それゆえに、掲載作の本文が、戦前ないし戦中の初出から同誌への再録、そして占領期の単行本への再録にかけて、いかに改稿され、流通していくかを追いかけて分析することができる。その作業を通じて、例えば角田喜久雄の「白銀秘帖」（『週刊朝日』一九二九年一二月一日～二九日）が、性的な表現・描写を取り除くなどの改稿によって戦中の規範に適応し、そしてほぼそのままの本文で一九四九年に刊行されたことが判明する。このことは、戦前・戦後の思想や感性の枠組みが断絶などしていないことを表すうえに、大衆文学を別席として置く文学観が、これらを検討せず、ある種の普遍であるかのように許容さえてきたことを示している。

第五章では、「海戦」（『中央公論』一九四二年十一月）から「理想の良人」（『人間』一九四七年二月）へと至る丹羽の主要な小説および創作論を辿り、創作論の方は戦中から戦後へと引き継がれるものの、実作においては「私」が退いていき、風俗小説へと転じていくという転回を明らかにしている。客観に徹する作家という像が強固な丹羽だが、海軍報道班員としての体験に基づく私小説「海戦」においては主観的に領略した情景を描写した。敗戦を跨いでも、一九四七年に「虚構派」と「真実派」の対立図式ができあがると、丹羽は「デツサン」に基づく「主観的歪曲（デフォルマシオン）」を提唱することで、「虚構派」として織田作之助や坂口安吾に比肩することを狙い、一時的に話題を呼ぶことに成功した。その際、丹羽は実作のジャンルとして、語り手が〈神〉の視点から物語る風俗小説を選び、戦中の自我の問題化を避けようとした。この背景として、報道班員の新門姫介の眼を通して敗戦間際の海軍基地の実態を暴露的に描いた「海軍暴露物」（一九四六年）が、往々にして新門と作者・丹羽を結び付ける形で数多の批判を浴びたことが挙げられる。

第三部は、中間小説・風俗小説を文学史的な視座で捉えた上で、その再評価へと展開していく。

第六章では、まず、林が一九四七年に時と場を「いま・ここ」から離れた珍しい話という小説の原型に立ち返る〈物語論〉を提唱し、「妖魚」（『小説と読物』一九四六年八月）が第一回大衆雑誌懇話会賞の首席を獲得するなど、その〈物語論〉と実作が、大衆雑誌の編集者の支持を集めるまでを追跡している。興味深いのは林の「新戯作派」に対する態度で、その戯作精神を抽出して同調し、文壇の寵児である彼らと同じグループの一員として並び立つことを目指す一方、ま

さに「いま・ここ」にある闇市場等を題材とする点には批判を加えるというアンビヴァレントなものであった。続けて、『文學界』の丹羽や舟橋聖一といった同人たちが、林とともに中間小説運動を推進し、中間小説作家という立場を分有したことが一因となって、当初は林の読物小説を代表とした中間小説という用語が、風俗小説を含むまでに拡散していったという概念変容を明らかにしている。また林は、通俗性の強さゆえ『文學界』のような文芸誌では悪目立ちしたが、批判を浴びながら耳目を集めるという彼特有のスタイルで、文壇へのカムバックを印象づけた。

第七章は、従来軽視されてきた一九四八年のアルチスト・アルチザン論争を起点にしている。その中で花田清輝ら戦後派が作った「芸術家」と「職人」の二項対立図式は、中村光夫が『風俗小説論』（河出書房、一九五〇年六月）で踏襲して定説化が進み、丹羽ら風俗派を、批評精神を持たない「職人」と定め「芸術家」から排除し続ける装置となっているという点で、重要な論争である。この図式の裏には、占領期の風俗小説の中心的な書き手がマルクス主義と距離を置く作家たちだったため、その批評精神が認められなかったという側面があり、筆者は、それとは別種の批評を内包している風俗小説を「社会風俗小説」と呼ぶことを提唱している。例えば丹羽の「鬼子母神界限」（『新生』一九四六年一〇月臨時増刊）は、人間をプロレタリアートやブルジョアに硬直的に分類して理解した気になることを拒み、実感に即した柔らかな言葉で理解しようとする実践報告をなしている「社会風俗小説」である。

第八章では、その「社会風俗小説」のさらなる実例として、石坂の連作「石中先生行状記」のうちの「根ツ子町の巻」（『小説新潮』一九四八年九・一〇月）を論じている。同作は、猥褻文書の頒布等を禁ずる刑法第一七五条を根拠とした摘発を受けたが、「好色文学」などではなく、「伝説時代」という表現を通じて、〈大日本帝国〉と〈戦後日本〉の、表面上の相違とは裏腹な構造的類似性を浮き彫りにするなど、現実に対して批評的な小説であることを明らかにしている。小説家・石中先生は、現実の一面に「デフオルマシオン」を施して生まれる「フィクション」が「文学」であるという、当時広く共有されていた「文学」観を有している。そんな彼に対し、吉田青年は「伝説時代」という表現で、今日は、具現化されないまま言葉だけが氾濫・伝播し、架空の〈戦後日本〉が仮構される時代にあるという卓見を語る。すると、現実を喪失した「伝説時代」には「文学」の仮構性が埋没することになるため、石中先生は大いに動揺するのだ。石中先生自身が、こうした状況に解決を与えているわけではないが、本作品にはユーモアを交えながらも、文学がどのようなものであるべきかについての問いがあると言える。

敗戦後の林・石坂・丹羽の三者に共通するのは、新日本の建設をめぐって唱えられるイデオロギーに対する懐疑の姿勢、そして戦中の活動やそうした姿勢ゆえに左翼陣営から執拗に攻撃された点である。イデオロギーに懐疑を示す立場を取る時、必然的に作者自身の立場や主張は既存の

体系的規範から切れて個別的となり、簡単に名づけたり分類したりすることのできる明瞭なものではなくなる。そのことが、彼らの中間小説・風俗小説が占領期に隆盛を極めながらも、特に文壇の主流派であった左翼陣営から批評性を認められなかった主因である一方、今日の研究者が個々の文学者やその小説の読解を積み上げていくべき大きな理由ともなる。

また、中間小説・風俗小説を、戦後の物珍しい風俗や世相への即応とのみ見るのではなく、その背景にある戦中の体験を踏まえることが重要であり、それによって、中間小説・風俗小説の真価を捉え得る。一九四〇年代という区分を用い、戦時期と戦後占領期の連関が軽視されてきた作家史・文学史の記述を問い直すことが、改めて必要であると考ええる。

Thesis Abstract

No. _____

Registration Number	☐ "KOU" ☐ "OTSU" No. _____ *Office use only	Name	須山 智裕 Suyama Tomohiro
Thesis Title 戦中との連続性における中間小説・風俗小説の再検討 ——南方徴用作家、林房雄・石坂洋次郎・丹羽文雄を中心に Reexamination of middle-brow novels and novels of manners in continuity with the wartime period : Focusing on Hayashi Fusao, Ishizaka Yojiro, and Niwa Fumio who are writers sent to the southern front			
Thesis Summary This dissertation focuses on writers sent to the southern front during the Asia-Pacific War and traces their literary activities and creative endeavors that led to the rise of middle-brow novels and novels of manners during the postwar occupation period. In particular, this discusses Hayashi Fusao, who was the starting point of the middle-brow novels, Niwa Fumio, who has always been at the center of discussions of novels of manners, and Ishizaka Yojiro, who achieved success by combining novels of manners with theory on democracy and postwar Japan. What Hayashi, Ishizaka, and Niwa had in common after the war was their skepticism toward the ideology advocated for the construction of new Japan, and their wartime activities and this attitude led to them being relentlessly attacked by the left-wing camp. When one takes a stance that shows skepticism toward ideology, the writer's own position and arguments inevitably become separate from existing systematic norms and individual, no longer clear-cut and easily named or categorized. This is the main reason why their middle-brow novels and novels of manners, although they flourished during the occupation, were not recognized as critical, especially by the left-wing camp that was the mainstream in the literary world. But at the same time, it is also a major reason why researchers today should continue to build up their understanding of individual writers and their novels. Furthermore, it is important to view middle-brow novels and novels of manners not simply as responses to the unusual customs and social conditions of the postwar period, but to take into account the wartime experiences that underlie them, and by doing so, the true value of middle-brow novels and novels of manners can be grasped. I consider it is necessary to reexamine the descriptions of one writer and literary history by using the 1940s as a division because we have overlooked the connection between the wartime period and the postwar occupation period of them.			